



若者の意見を聴くワークショップ ～（仮称）桑名市こども計画に関連して～

報告書

2024.09.25

「（仮称）桑名市こども計画」策定 ワークショップ

「（仮称）桑名市こども計画」とは？

「第2期桑名市子ども・子育て支援事業計画」では、「子ども・子育て支援事業計画」と「次世代育成支援法に基づく行動計画」を一体的に作成し、〈子ども〉〈親・家庭〉〈地域〉の3つの基本的視点に立って施策を展開しています。次期計画ではこども基本法に基づく市町村こども計画についても一体的に作成する「（仮称）桑名市こども計画」として整理し、「こどもまんなか社会」の実現に向けて取り組む計画としていきます。

ワークショップの目的

「（仮称）桑名市こども計画」を策定するにあたり、子どもや若者の意見を聴き、その声を大切にして、子どもや若者にとって最もよいことは何かを考えるため、若者の意見や考えを引き出すワークショップを行い、子どもに関する施策に反映する。

ワークショップの主な内容

- ・ 7月から8月の期間に、1回につき3～4時間程度のワークショップに、3回参加する。
- ・ ワークショップには、株式会社博報堂若者研究所の方にも入ってもらい、5～6名のグループで話し合う。
- ・ ワークショップの前には、事前宿題を作成する。（子ども時代の振り返りなど時間がかかると思いますので、時間の余裕があるときに取り組んでください。）
- ・ 政策提案について、10月に中間発表、1月に発表会をする。



【監修・サポート】 株式会社博報堂若者研究所

東京を中心とした大学生とのワークショップ（学生会議）の定期的な実施を通じて、若者世代の価値観や時代の変化を抽出し、さまざまな企業・組織の活動や事業開発支援などを行っている若者研究所の代表／メンバーが、魅力的な議論を実現するための設計や運営、気づきの抽出をサポートします。



【運営・実施】 桑名市役所 SDGs推進課&子ども未来課メンバー

行政の実務を担当する職員が、学生たちの言葉や考えを直接聞き、引き出します。（必要に応じて行政の現状やこれまでの施策を共有することもできますが）学生の皆さんの意見や価値観を引き出し、受け止めることを第一にプロジェクトを進行。それらを行政運営にどのように反映し得るか？を考えます。

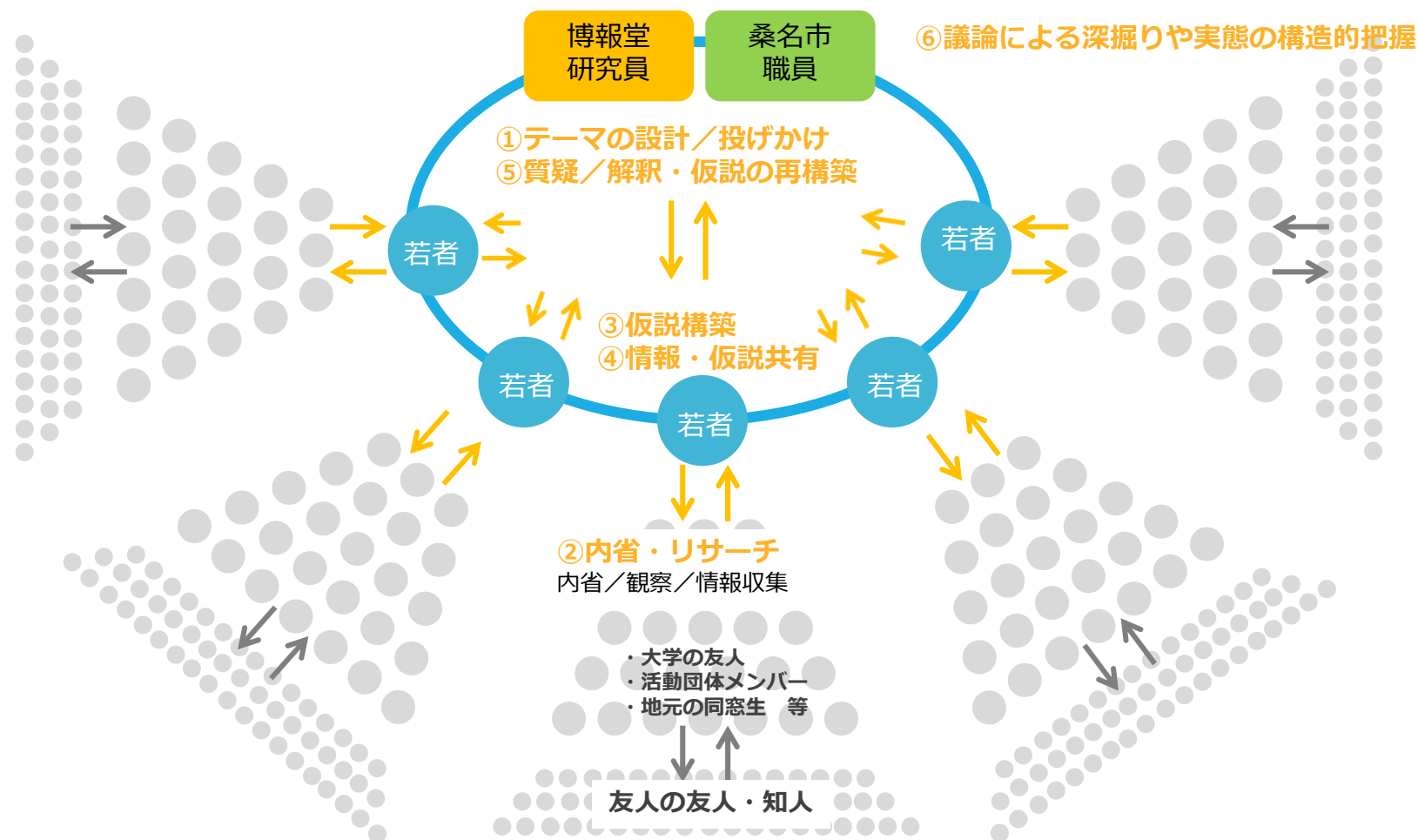


【探求と思考の中心】 愛知大学加藤ゼミ 3年生のみなさん

参加を希望する12名のゼミ生メンバーが本プロジェクトの主役です。学生のみなさんには、ワークショップに向けて自分自身の生活や過去、気持ちを振り返ったり、友人知人へのヒアリングなどを行なっていただき、若者世代ならではの視点や、リアルな感覚を大切にしていいただきながら、一人一人がテーマについての仮説や意見を持ち寄り、当日の議論を通じてそれを深めていただきます。

基本構造

学生の皆さんに、自分自身の生活や過去・気持ちの内省とともに、見聞きしてきた周囲の若者たちへの観察やヒアリングなどを通じて事前課題に取り組んでもらい、それらを持ち寄った上でのワークショップによる議論によって、見過ごしていた課題や若者のなかに現れている新たな時代の兆しを見出します。



- **正解のない問いに、共に挑む（脱正解中毒）**

現代に存在する多くの社会課題がそうであるように、子ども施策も少子化対策も、「これをやれば良い」という正解があるわけではありません。だからこそ、課題の根本はなんだろうか？と考えたり、これまで目を向けられていない視点や解決のアプローチはないだろうか？と想いをめぐらせること、それらを皆で共有し、深めることに意味があります。「正解を探す」というよりも「仮説やアイデアを生み出す」創造的なモードで挑んでください。

- **自分自身の経験やリアルな感覚、若者世代ならではの視点を大切に**

日々の業務のなかで課題に向き合っている市役所の職員にはなく、学生の皆さんにはあるもの、それは皆さん自身の感覚や思いや経験です。子ども時代の実体験やその時の思いのなかには、大人は忘れ去ってしまっていることや、「そういうものだ」という時代の常識として流されてしまっているようなものがきっとあります。皆さんにとっては当たり前で大事にしていきたい事柄や価値観が、異なる世代にとってはそれほど重要なものと認識されていないということも十分考えられます。今回の企画では特に、「いつの時代も大事なこと」以上に、「これからの時代だからこそ」、「今の若者だからこそ」という視点を意識してみてください。

● 傾聴の姿勢で。（評価者にならない）

垣根や緊張感のある関係は、一見クオリティをあげるようで、「間違ったことは言えない／求められていることを言わなくては」という意識を生み、結果的に本音や新しい発見が見つかり難くなってしまいます。

若者たちが語る内容のなかには、職員にとって周知の事実や、間違った捉え方にみえるもの、過去に実践しているような内容もあると思われますが、まずは若者たちの経験や考えに対して興味を持って全力で聴く態度を大切にします。なぜそのように考えるのか？一緒に理解しようと心がけて問いかけると、分かっていたつもりのことも表面的な理解に過ぎなかったと気づくことや、他の事実や感覚との関係に対する気づきにつながることもあります。

● 若者たちの話を聞きながら、自分の心と思考を動かす

若者たちの声を聞く一方で、それを聞いた際の自分自身のなかに浮かぶ感情や考えも大事にします。共感の気持ちが湧く場合、それは世代を超えて多くの人が望む時代の変化かもしれません。ある種の違和感を覚える時は、把握しきれていない変化や、重要な背景がその周辺にあるのかもしれません。行政のプロではない若者たちは多くのヒントは与えてくれますが、実現可能な施策に落とし込むため、どうしたらこの気持ちに込えられるか？を意識しながら向き合います。

1 8歳未満の子どもでも、子どもを育てる親でもない大学生。
両者の間にいる存在だからこそ語れる／考えられる
“リアル”かつ“未来思考”の「子ども施策や少子化対策」に資する意見を。

WS①

(キックオフ)

自己紹介や取り組みに際しての考え方を共有し、チームビルディングを行う

WS②

過去を振り返る

自分自身が育ってきた（地域での）子ども時代を振り返り、そこにあった当事者としての喜びや苦しみを考えてみる

WS③

未来を想像する

自分が大人となり社会を生きていく時、大切にしたい価値観やありたい暮らしのイメージ。その際にハードルだと感じること

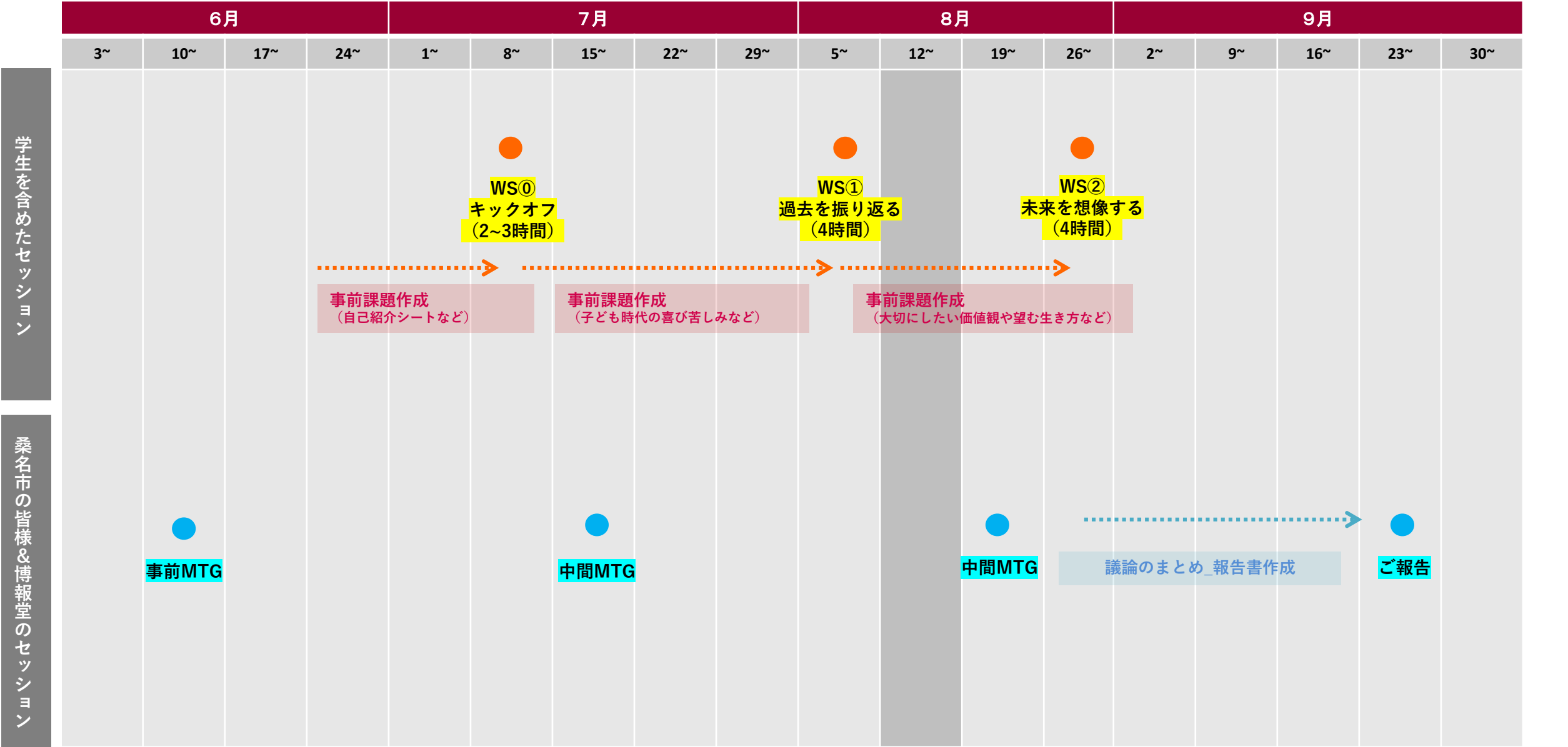
(アイデア発想)

行政や社会からどのようなサポートがあったら良いか？学生視点で考えてみる



政策提案発表

全体の実施スケジュール



WS①

キックオフ

自己紹介や取り組みに際しての考え方を共有し、
チームビルディングを行う

WS①キックオフの概要

7月8日 18:00～21:00 @愛知大学名古屋キャンパス

アジェンダ

- 18:00-18:15 はじめに_趣旨と進め方の説明
- 18:15-19:00 メンバー自己紹介
- 19:00-19:20 アイスブレイクワーク(20min)
- 19:20-19:30 休憩
- 19:30-19:45 桑名市での取り組みの例や課題について
- 19:45-20:25 プレグループ議論
- 20:25-20:45 全体共有
- 20:45-21:00 次回に向けて



愛知大学ホームページに掲載された情報より転載
https://www.aichi-u.ac.jp/social/s_news/69365

WS①の事前宿題：自己紹介シート

最近の自分が写っている写真

子ども時代の自分の写真

名前（カタカナで姓か名のみ）

所属

今、好きなことや気になっていること

自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など

自己紹介シート

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） ヨシカズ
		所属 愛知大学 法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 大学から始めた部活 旅行 車で友達と出かける 犬と散歩すること		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など パーキングエリアではしゃいで前歯を折った 運動が好きで休み時間はずっと外にいた		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） タイヨウ
		所属 愛知大学 法学部加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること おやすみすること 旅行		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 休み時間は外に出てサッカーをしていた。メッシになりたかった。 眠さえあれば外に出て自主練していた。		

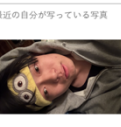
WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） カコイ
		所属 愛知大学 法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること ジムでの筋トレ、ロックバンドのライブに行くこと		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など とにかく元気で毎日片道1時間の登下校をし、家に帰った後も30分かけて自転車で公園に行き遊んでいた。		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） ユイナ
		所属 愛知大学法学部
今、好きなことや気になっていること ・行ったことのない所へお出かけすること ・ドライブすること ・ライブに行くこと ・友達とお酒を飲むこと ・ネイルをすること ・海外ドラマを見ること ・音楽を聴くこと ・海外旅行へ行きたい ・古着屋へ行ってみたい ・料理上手になること		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など ・人見知りや大人しい ・基本一人で何でもできるので手が掛からない ・念願の弟が生まれて嬉しかった ・涙如前髪を生え隠まで切ってしまい、母親を困らせた ・ゲームと公園へ行くのが大好きだった ・友達の家に入り浸る ・家族でUSJに行き楽しんでたが、かき氷を食べる直前に地面に落とし近く ・保育園の給食が美味しかった、毎回味いしていた		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） キョウゴ
		所属 愛知大学 法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること ダーツ、ボウリング		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 留守番で一人で家にいることが多く、内向的な性格だった。 小学校はサッカー部に入ったため、外で遊ぶことも増え、人と話すことが多くなった。		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） ミク
		所属 愛知大学法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 小さい頃からずっとコナンが好きで部屋に漫画全巻揃ってます！ ドラマや映画も好きで、一生家で過ごせるインドア派でしたが、最近は一人旅にもハマってます		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 自己主張が苦手で目立ちたくない、本が好きで国語が得意という、絵に描いたような真面目タイプでした 水泳が得意だったので小学校の夏休みは毎日プールに行くのが楽しかったです		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） サツキ
		所属 愛知大学法学部
今、好きなことや気になっていること サッカー、RADWIMPS、洋楽、旅行、アルバイト、アニメ、漫画、ドラマ、ゲーム		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 学校が終わったら毎日のように公園で友達とサッカーをしたり、友達の家でゲームをしたりしていた。 また、サッカークラブに所属しており、小学校6年生の頃に全国大会に出場した。		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） タケル
		所属 愛知大学法学部加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること K-POP		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など サッカーやピアノや算盤など幅広い習い事をしていた。		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） ミサ
		所属 法学部、加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 好きなこと…TWICE、旅行 気になっていること…就活情報、災害、円安		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 母の真似をするのが大好きで、いつもあとを追い回していた。 食べが早いので、運動会の後ごちそう会を翌日していた。 幼稚園を持ってコッコンやるタイプで、幼稚園や夏休みの課題は早めにはじめられるタイプだった。 小学中は生徒会を経験したり、友達と遊ぶのが大好きで部活はいつも休んだりしていた。 運動中チーム運動が好きで、中学はバスケット部に所属していた。		

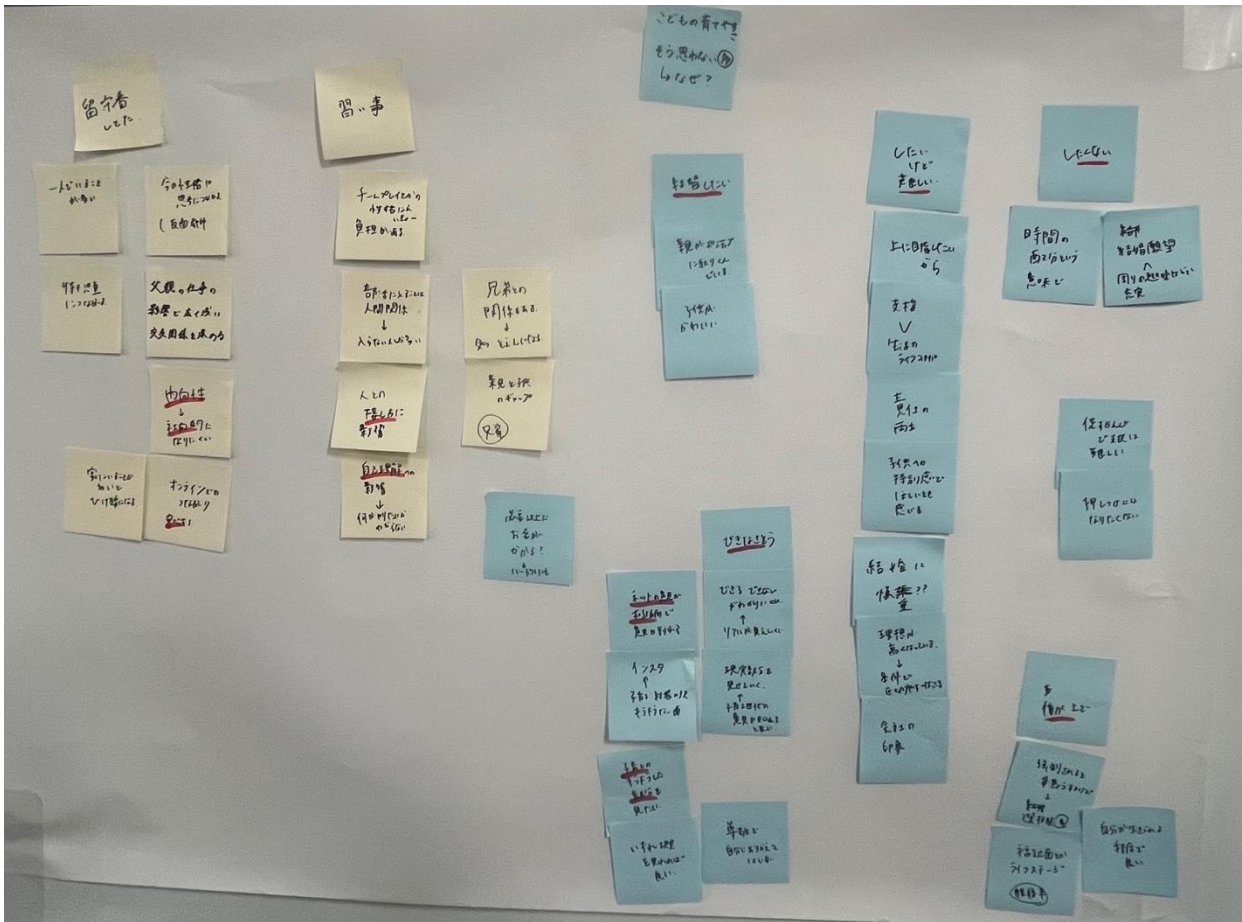
WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） カノン
		所属 愛知大学法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 好きなことはおいしいものを食べたり、作ったりすること。一料理を作る動画を見るのも好きです 食べ過ぎってしまうので効率よく簡単に痩せられる方法が気になる！		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など 週7で習い事をしてた。（ピアノ、テニス、書道、英語、水泳、体操など） 演奏することが好きで中学生までは何らかの楽器を弾いていた。 →ピアノ、ユーフォ、サクソ		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） コウキ
		所属 愛知大学 法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 好きなこと→一部ロック、K-POPを聞く、ギター、歌う。 気になっていること→自分の将来		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など ダンボールなどを使い、自分で色を組み立てたりして家の中に秘密基地を作ったりしていた。 小学校の低学年はな兄につきまきりで、兄の友達とよく遊んでいた。 夏休みは毎日外に出て遊びに行くくらいに活発で、隣のゲーセンまで自転車で行くほどだった。		

WS⑩の事前宿題案：自己紹介シート		
最近の自分が写っている写真	子ども時代の自分の写真	名前（カタカナで姓か名のみ） リナ
		所属 愛知大学法学部 加藤ゼミ
今、好きなことや気になっていること 好きなこと→韓国ドラマ鑑賞、自然スポーツ回り 気になっていること→就活		
自分はどんな子どもだったか？印象に残っている子ども時代の思い出 など いつも外で遊んでいて、活発な子でした。小学校では水泳、駅伝、バスケットに、中高は水泳部に所属していました。 お友達と話すのもずきで、学校の後はお友達と遊ぶことが多かったです。 部活ではキャプテンを務めたり、生徒会の一員として活動したりしていました。		

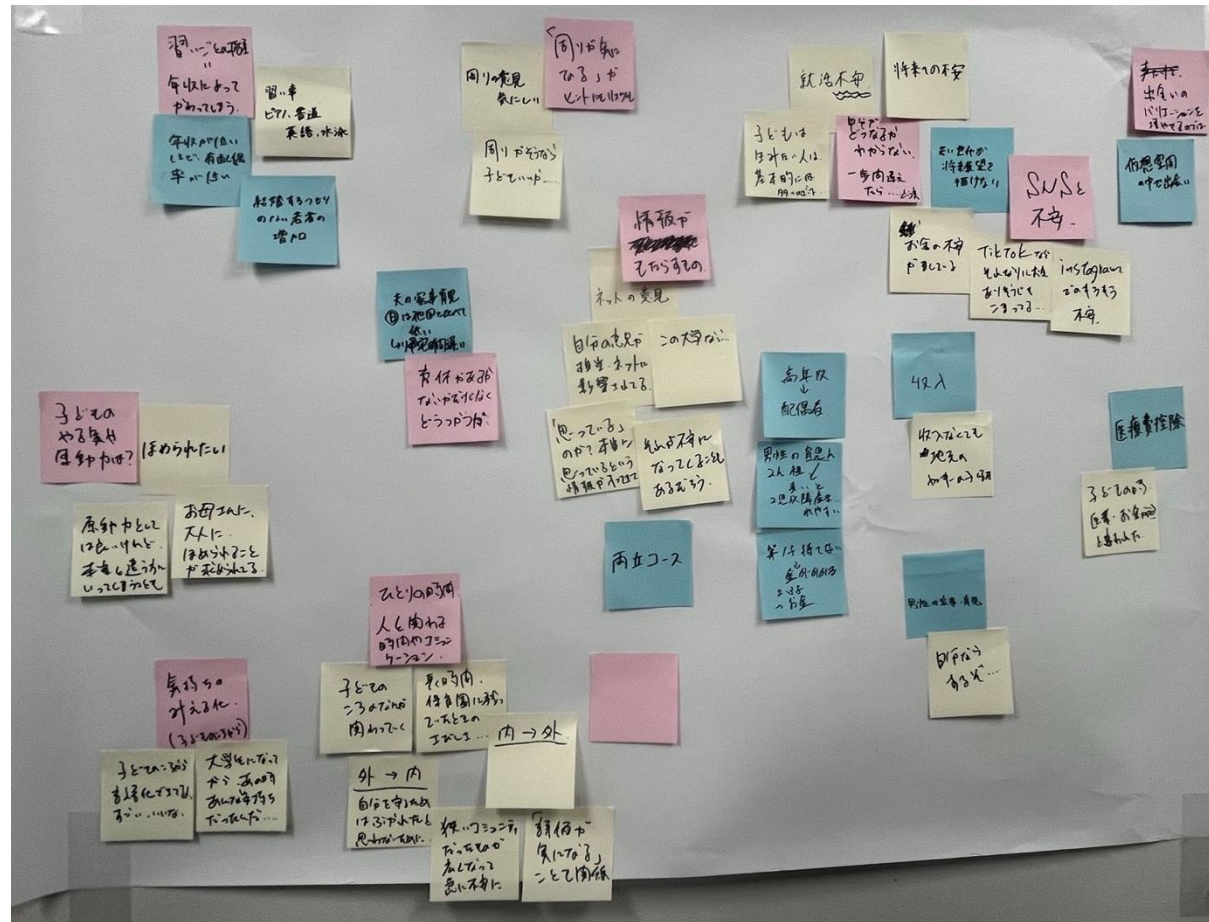
グループ①

ファシリテーター：山崎



グループ②

ファシリテーター：ボヴェ



【幼少期の体験の現在への影響】

- **自分でコントロールできなかった子供時代の経験が現在の性格や自分のとらえ方に影響を与える**
 - 「留守番により、内向的なモードや自己認識が芽生えた。」その上で人や状況に応じてモードを切り替えている感覚。
 - 「習い事を通じてチームワークなど人との接し方について学べた」
一方で、習い事は基本的に親が決めていたことから、自分の意志や欲求の混乱につながったという声も。

【将来の結婚・出産・子育てについて】

- **将来への認識①：SNSの情報が極端かつ錯綜していることから、そもそも結婚/出産についてよくわからず、出来なさそう**
 - SNS上では、極端な発信が多くて結婚/出産のリアルが見えづらい。自分がそのようになる想像ができない。
 - 「むしろ今は結婚/出産のキラキラした部分だけ見ていたい」気持ちもありリアルな情報を自分から探しに行かない面も。
- **将来への認識②：結婚/出産はしたいけど難しそう**
 - 結婚/出産はしたいが仕事でも上を目指したい。プライベートとの両立が難しそうで子供への責任を感じてしまいそうな不安。
 - マッチングアプリなどで条件で区切りやすくなっている中、パートナーへの理想が高くなり結婚に慎重になっている感覚。
- **将来への認識③：結婚/出産はあまりしたくない**
 - プライベート（趣味や人間関係など）が充実しているから、そこに時間やお金をかけたい。自分の生き方を貫きたいと感じる。
- **共通点は結婚/出産はあくまで選択なので、促されることに対する抵抗感を感じる**こと。金銭面よりも、時間/責任で慎重になる。

【幼少期の体験の現在への影響】

- 「習い事」から見えてくる格差と子ども時代の心
 - 今回参加学生の多くが多様な習い事を経験し、それが人生の変化のきっかけや居場所になるなど大きな影響を持っている
 - 人によっては自分自身がやりたかったこととは限らない、親の方針や時間を取られすぎる問題も
 - 年収や家庭環境によって習い事の格差は大きく、体験の格差に結びついていることの問題
- 子供の「やる気」の原動力は
 - （親に、大人に）褒められたいが子どもの頃の原動力にあった
 - 褒められたいは大きな原動力である一方で、本当に自分の気持ちとは違う行動を取ったりしてしまうことにもつながる
- 子ども自身が「自分の気持ちを言語化、見えるか」することはできないか？
 - 大学生になって（今回振り返ることで）あの時はあんな気持ちだったということが分かった
 - 子どものころから自分の気持ちを把握して、言語したり伝えられる人もいたが、それはどうしたらできるのか？
- 内向的か？社交的か？そのタイプと変化が子ども時代を語る際の重要な視点
 - 「留守番で一人で家にいることが多く、内向的な性格だったがサッカー部に入って外で遊ぶ、人と話すことが多くなった」
 - 「学校でいじめやハブられる現象がおこった時、自分を守るために自ら一人でいるという認知と行動になった」
 - 子ども時代のなかで狭いコミュニティから広いコミュニティに行く変化の瞬間→社交的に／不安から内向的に

【将来の結婚・出産・子育てについて】

- 「**将来（の自分）への不安**」が多くの大学生を覆っている
 - 就活ができるかという不安、将来への不安、お金への不安、、、学生の時点で未来を考えると不安が真っ先にでる
 - （社会全体が豊かに、皆が幸せにはなっていないかなそんななかで、自分は大丈夫か？上手くやれないのではという不安）
 - 一歩間違えると、（はじめの就活などで）失敗をしたら**取り返しがつかない**という感覚
- **不安はSNSを中心とした情報によって生まれる**
 - Instagramでキラキラとした生活を見ることで、「**自分はなれない**」という不安
 - TikTokやXを通じて苦しい生活や、（配偶者や社会に対する）不満を見聞きすることで生まれる「**自分もそうなる**」不安
- 周りが（SNSが）そう言っているから、**実態以上に不安や不満が増幅している可能性も**
 - 「日本は子どもを産み育てやすいと思わない」「温かい社会の実現に向かっていない」ことは思うが事実がどうかは不明
 - 結婚や子どもは無理／不要ということが印象論で加速しているのならば、**感覚や印象の変化による逆回転も起こり得る？**
 - （男性の）育休という制度があるかどうかよりも、それを使うか？どう使うか？の意識の変化が大事になる
若い世代の男性の家事や育児に対する意識は相当変わっているのではないか？（自分/自分達の世代は当たり前にする）
- **出会いのバリエーションが欲しい**
 - 桑名市の試み「仮想空間のなかでの出会い」に対して好意的。「適当な相手にめぐりあえない」若者の感覚がある
 - （マッチングアプリは若者にとって当たり前で重要な出会いの形に。一方でよりマッチングのハードルを高めている面も）

WS①

過去を振り返る

自分自身が育ってきた（地域での）子ども時代を振り返り、
そこにあった当事者としての喜びや苦しみを考えてみる

WS①過去を振り返る 概要

8月6日 13:00～17:00 @愛知大学名古屋キャンパス

アジェンダ

- 13:00-13:10 はじめに_前回の振り返り
- 13:10-14:50 発表：各若者メンバーが全体に事前課題を発表
- 14:50-15:00 休憩
- 15:00-16:15 グループディスカッション 5名・4名にて
- 16:15-16:20 休憩
- 16:20-16:50 全体共有：各グループでの議論の要点を共有
- 16:50-17:00 次回に向けて

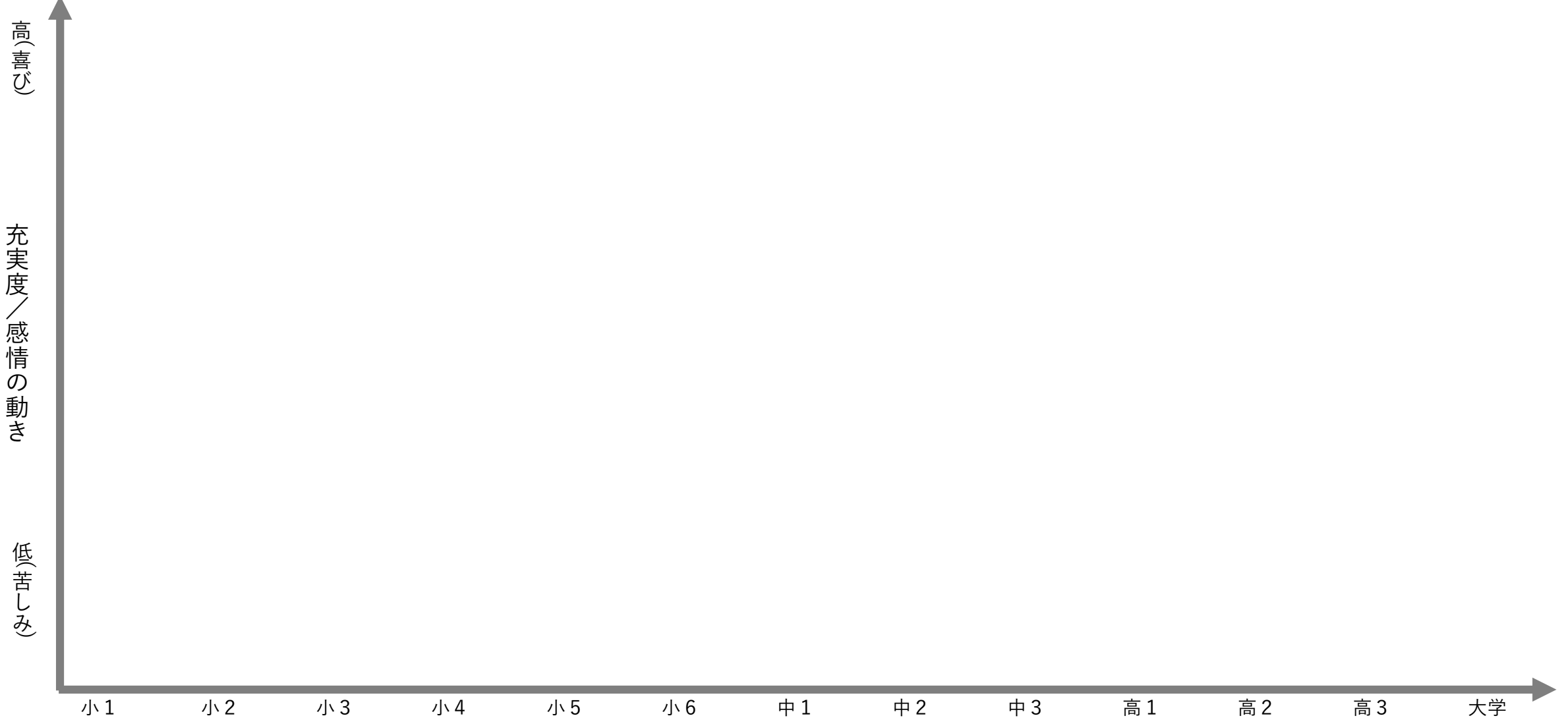


WS①の事前宿題：子供時代の振り返り（ライフムードメーター）

自分自身が育ってきた地域での子供時代を振り返り、その当時感じていた喜びや苦しみについて考えてみてください。

自分がいつ？なぜ？感情が動いたのか、どんな想いで生きていたのかなどをなるべく具体的なエピソードも交えながら書いてみてください。

※人に話したくないような内容を無理に書く必要はありません



WS①の事前宿題：子供時代の振り返り（対〇〇への想い）

自分自身が育ってきた子供時代を振り返り、他のヒト・モノ・コトに対して感じていたことを思い出してみてください。今でも**忘れられない思い出**やなんとなく感じていた**違和感**、今の自分の**価値観に影響していること**など、自由に書き出してみてください。対「〇〇」は自身でご記入ください（例 家族、友達、学校、家、スポーツ、食べ物、流行、旅行でいった海など）

対 〇〇

あああ

対 〇〇

あああ

対 〇〇

あああ

対 〇〇

あああ

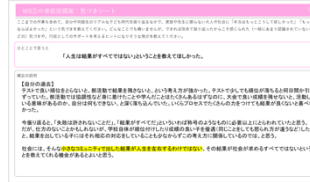
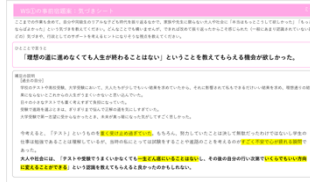
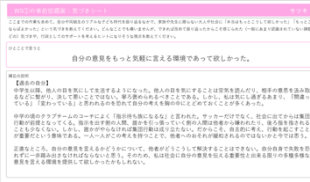
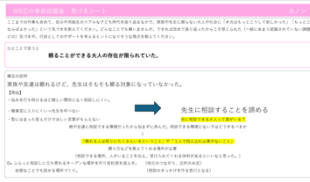
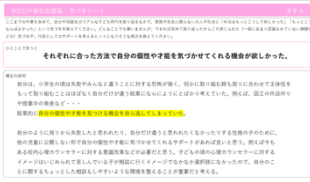
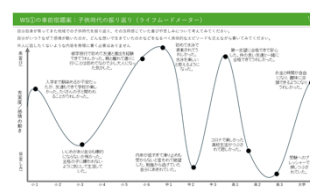
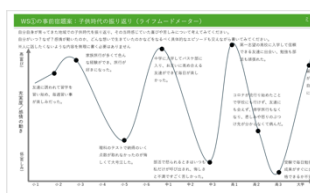
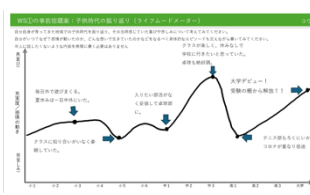
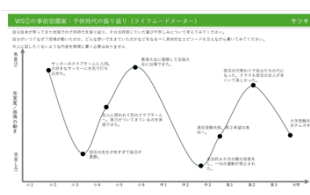
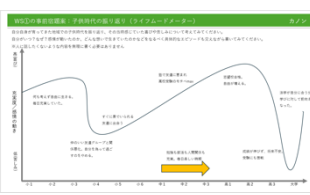
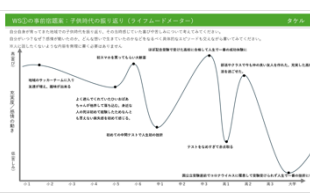
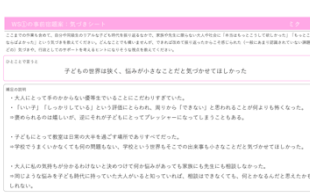
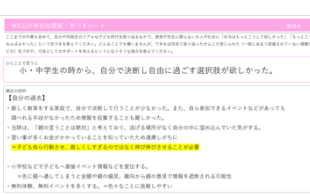
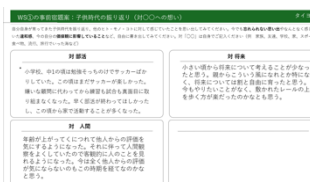
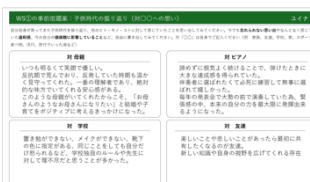
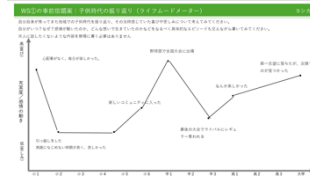
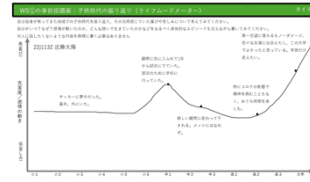
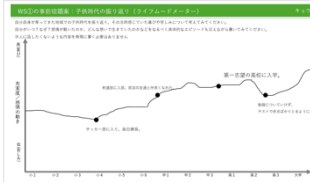
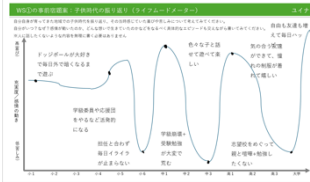
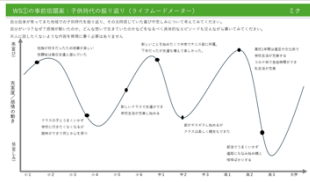
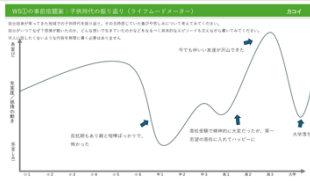
WS①の事前宿題：気づきシート

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

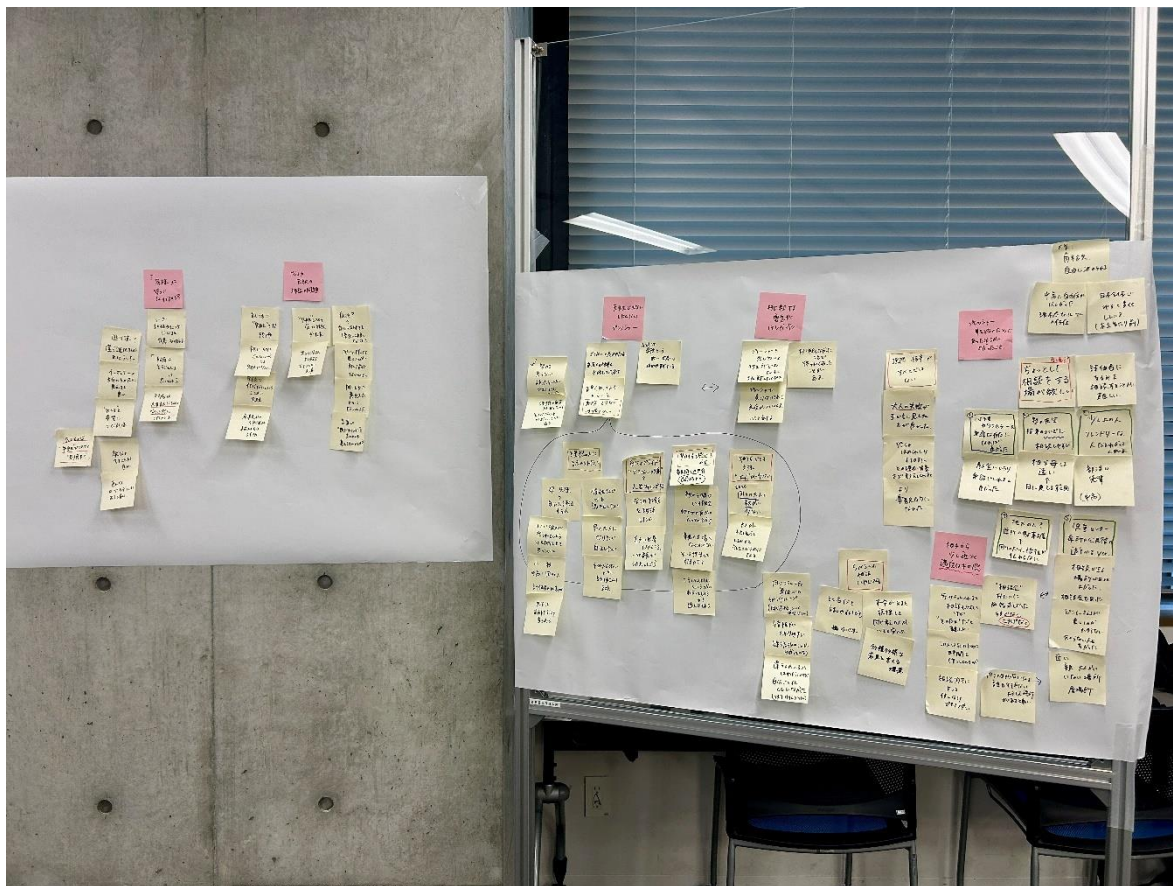
補足の説明

WS① 事前課題ワークシート



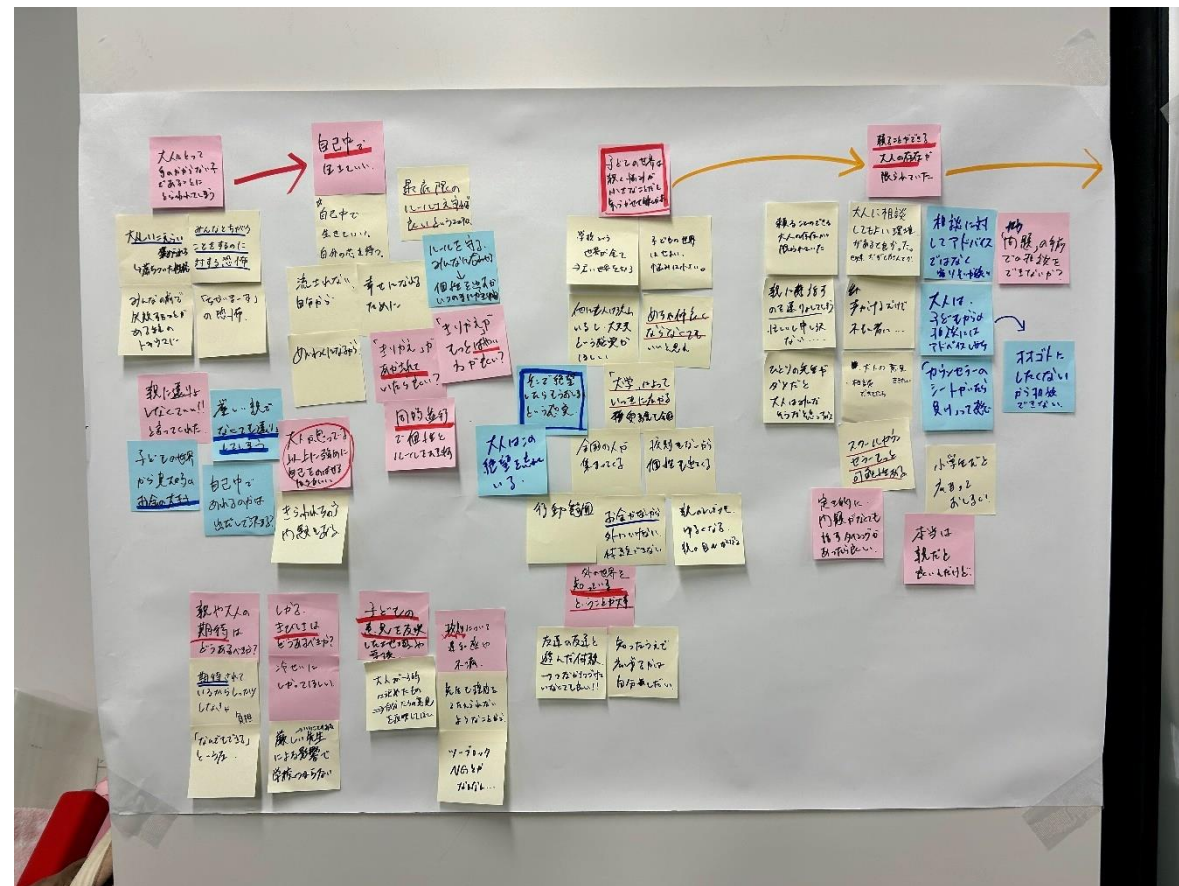
グループA

ファシリテーター：山崎



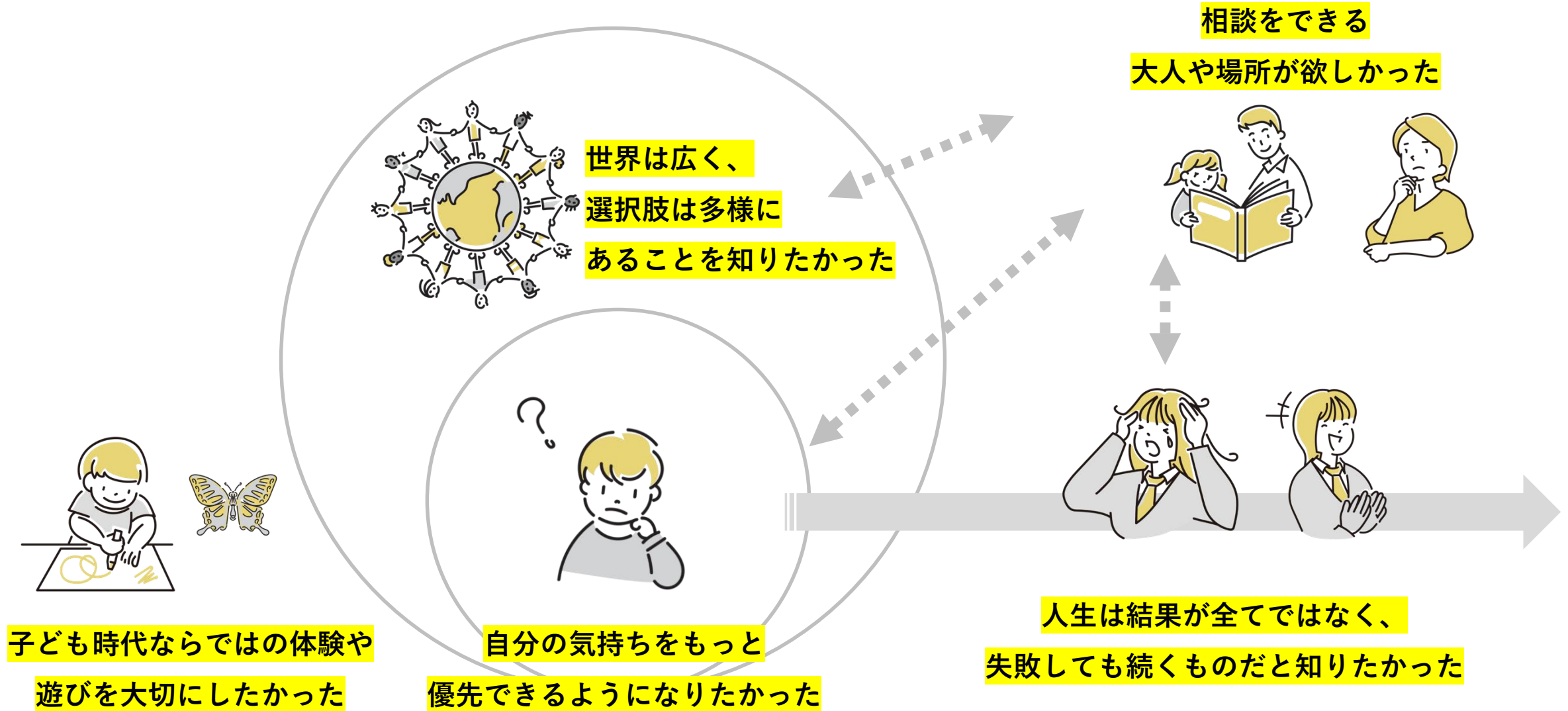
グループB

ファシリテーター：ボヴェ



WS①「過去を振り返る」 まとめ

学生たちが子ども時代を振り返り考えた「本当はもっとこうして欲しかった／こうならばよかった」こと



子どもだからこそその体験や遊びをもっと大事にしたかった



- 子どもだからこそ、新鮮・強烈に感じられる感動の体験が大事

- 小学校の授業の一環で幼虫を自分の手で捕まえて育てていた。
虫かごを大事に抱えて登下校し毎日お世話をしていて、朝起きたら蝶になっていた時の感動は今でも忘れられない。
- 富士山に登った時、夜の**10時に友達と抜け出してみた星空**が忘れられない（大人になってからではない感動）
- パンツだけになって川で遊んだ時に感じた気持ちよさ／植木鉢の裏からたくさん出てきたダンゴムシ



- エリアによる「遊び」の偏り、「遊べる場所」がないという感覚

- 部活以外でも気軽にスポーツできるような場所がほしかった。
 - 近くの公園はボール遊びができなかった。外に遊びにいくとお金がかかることが多く、学生には限界があった。
 - 最近では、サッカー部や野球部などのメジャーな部活の廃部が増加しており子供のスポーツ離れが深刻に。
- 自然以外の遊びが欲しかった
 - 当時は神社でサッカーするか川で遊ぶか、隣町のゲームセンターまで自転車で行っていた。
 - 近くにショッピングモールなどがあれば涼んだり温まることができたり、一日中そこで遊べたり、近くに駅があれば、苦労せず移動できる。近くに駅があればどんなに良かったことかとよく考える

子どもだからこそその体験・遊びをもっと大事にしたかった

WS①の事前宿題案：気づきシート

キョウゴ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

外で遊べる場所がもっとあれば良かった。

補足の説明

近くの公園はボール遊びができなかった。
外に遊びにいくとお金がかかることが多く、学生には限界があった。
部活以外でも気軽にスポーツできるような場所がほしかった。
最近では、サッカー部や野球部などのメジャーな部活の廃部が増加しており、子供のスポーツ離れが深刻に。

WS①の事前宿題案：気づきシート

コウキ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

近くに遊べる場所がもっとあってほしかった。

補足の説明

自分の家周りには田んぼや畑ばかりで夏休みなど友達と遊ぶ際はどうするかいつも悩んでいた。当時は神社でサッカーする川で遊ぶか、隣のゲーセンまで自転車で漕いで行っていた。近くに駅やショッピングモールなどがあれば涼んだり温まることができたり、一日中そこで遊べたり、苦勞せずに楽に移動できるのになとよく考えていた。今でも近くに駅があればどんなに良かったことかとしょっちゅう考えます。
あと、うちの家にはおこがずい制度がなく家のお手伝いをすることによって自分のお金を稼いでいました。
遊ぶためにはなにかとお金が必要になってくるので、もう少し親からもらえていたら我慢せずに遊んでいたのかなと思いました。

大人視点の補足

大人になってからでもできる経験であっても、**子どもの頃にするからこそ強く感情を揺さぶられ一生忘れることがない、大切な記憶となる**ことがある。今回の学生たちの話から多く挙げられた「自然との関わり」の体験にかかわらず、そうした機会をより多く子どもに提供することは大人や社会の大切な役割といえる。**住む地域によって可能となる遊びや体験が偏る**ことに加えて、近年は習い事など**金銭を支払わなければ体験できない**、**親につきそう余裕や時間がないと体験できない**といった**体験格差**が生まれている問題についてもより意識して取り組みを考えたい。



自分の気持ちをもっと優先できるようになりたかった

- 大人にとって“手のかからない子”になることに過度にとらわれてしまっていた
 - 親や先生は自分を“評価する人”という感覚があり、「お利巧・大人しい」「成績が良い」子供が褒められる傾向にあった
 - 授業で間違った回答をするとクラス全員から「ちがいまーす」と言われる。そんなシーンが子ども時代共通の嫌な思い出
 - 自分が人並みに振る舞えたと、それを維持しなければならないというプレッシャーを感じた
 - 大人の意見が「補助線」ではなく「強い基準」になってしまっている感覚になっていた
 - 親同士の子供に関する共有が耳に入ることで、**間接的に期待を感じ、親の立場まで想像して行動**してしまった
 - 親がする「お金の話」は子どもにとっては途方も無い金額に感じられ、習い事を遠慮したりやめられなかったりした
- 「みんな/ルールに合わせられるのが良いこと」→「個性がある・出せるのが良いこと」の切り替えに戸惑いを感じた
 - 大学前後や就活では「個性・自分らしさ」が求められ、今まであった“正解”があやふやになり、戸惑ってしまう
 - その時にはすでに挑戦することに対して腰が引け、自分の悩みや意思を自覚/共有することも難しく感じた
 - 他者への配慮や気遣いは最低限できればよく、自分自身を出せていることの方が大事だということをもっと早く知りたかった
 - 案A：子どものうちから他者と合わせることやルールを守ることと、自分の個性を出し主張することを**同時に育む**
 - 案B：合わせることから個性を出すことを重んじる切り替えを、もっと早い段階で意識的に行う
 - 案C：個性を大切に発揮することの方がずっと大事で、その土台として人と合わせることを覚えるのだと明示する

自分の気持ちをもっと優先できるようになりたかった

WS①の事前宿題案：気づきシート

タイヨウ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

自己中に生きていい

補足の説明

【自分の過去】

小、中、高と周りの目を気にして、人からの評価ばかりを気にして生きていた。
自分主体ではなく他人主体で行動していた。

他人へ配慮することがいいとされている日本だと思うけれど、その配慮、気遣いは最低限で良くて、自分の芯を持って生きることが大事だと早く気付きたかった。自分が気遣って形成されている上辺だけの環境より、自分を出せている環境の方が、過ごしやすいし、本当の友達も出来たと思う。
大人や社会には、自分の意見を遠慮なく言える場、自分軸で生きる大切さを教えてもらえたら良かったかもしれない。

WS①の事前宿題案：気づきシート

カコイ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

小・中学生の時から、自分で決断し自由に過ごす選択肢が欲しかった。

補足の説明

【自分の過去】

- ・厳しく教育をする家庭で、自分で決断して行うことが少なかった。また、自ら参加できるイベントなどがあっても調べられる手段がなかったため情報を収集することも難しかった。
- ・当時は、「親の言うことは絶対」と考えており、逃げる場所がなく自分の中に溜め込んでいた気がする。
- ・習い事が多くお金がかかっていることを知っていたため遠慮しがちに
⇒子ども自ら行動させ、厳しくしすぎるのではなく伸び伸びさせることが必要

- ・小学校などで子どもへ直接イベント情報などを宣伝する。
⇒先に親へ通してしまうと金額や親の偏見、趣向から親の意見で情報を遮断される可能性
- ・無料体験、無料イベントを多くする。⇒色々なことに挑戦しやすい

WS①の事前宿題案：気づきシート

タケル

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

それぞれに合った方法で自分の個性や才能を気づかせてくれる機会が欲しかった。

補足の説明

自分は、小学生の頃は失敗やみんなと違うことに対する恐怖が強く、何かに取り組む時も周りに合わせて主体性をもって取り組むことはほぼなく自分だけが違う結果にならぬようにとばかり考えていた。例えば、図工の作品作りや授業中の発表など・・・
結果的に**自分の個性や才能を見つける機会を自ら逃してしまっていた**。

自分のように周りから失敗したと思われたり、自分だけ違うと思われなくなったりする性格の子のために、他の児童に公開しない形で自分の個性や才能に気づかせてくれるサポートがあれば良いと思う。例えば今もある校内心理カウンセラーに対する意識改革などが必要だと思う。子どもの頃の心理カウンセラーに対するイメージはいじめられて苦しんでいる子が相談に行くイメージでなかなか選択肢になかったので、自分のことに関するちょっとした相談もしやすいような環境を整えることが重要だと考える。

WS①の事前宿題案：気づきシート

サツキ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

自分の意見をもっと気軽に言える環境であって欲しかった。

補足の説明

【過去の自分】

中学生以降、他人の目を気にして生活するようになった。他人の目を気にすることは空気を读んだり、相手の意思を汲み取るなどに繋がり、決して悪いことではない。寧ろ褒められるべきことである。しかし、私は気にし過ぎるあまり、「間違っている」「変わっている」と思われるのを恐れて自分の考えを胸の中にとどめておくことが多くあった。

中学の頃のクラブチームのコーチによく「指示待ち族になるな」と言われた。サッカーだけでなく、社会に出てからは集団行動が前提となってくる。指示を出す側の人間、誰かを引っ張っていく側の人間は他者から嫌われたり、後ろ指を指されることも少なくない。しかし、誰かがやらなければ集団行動は成り立たない。だからこそ、自主的に考え、行動を起こすことが重要だという意味である。一人一人がこの考えを持つことで、他者へのおそれが緩和されるのではないかと今では思う。

正直なところ、自分の意見を言えるかどうかについて、他者がどうこうして解決することはできない。自分自身で失敗を恐れずに一歩踏み出さなければならないと思う。そのため、私は社会に自分の意見を伝える重要性和出来る限りの多種多様な意見を言える環境を提供して欲しかったかもしれない。



自分の気持ちをもっと優先できるようになりたかった

- 評価やルールを言われる際にその理由や背景をしっかりと知れたら良かった

- 褒めたり怒られたりする際に、それを「普通」「正解」としてそのまま受け入れざるを得なかった
- 厳しい校則も、理不尽だと思いながらも従わなければならなかった
- 実際に理由があればそれを細かく教えてほしかった、先生も理由を語れないような、特に理由がないものならば強制されたくなかった

WS①の事前宿題案：気づきシート

ユイナ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことと言うと

もっと納得のいく校則にしてほしかった。

補足の説明

今まで校則に対して理不尽だなど感じる事が多かった。 ex)地毛証明、ファスナーの位置、髪型、飲料の種類指定
自分自身、入学する度に、生まれつきの髪や目の色であることを証明するため生徒指導の先生のもとへ親と行くのが面倒だった。

この校則がなぜあるのか先生に尋ねた所、先生も存在する理由を理解していなかった。

学校生活を送るためには一定の規律が必要だと思うが、自分たちが過ごす学校のルールを大人が一方的に決めるのではなく、自分たちの意見を反映してほしい。

大人視点の補足

一般的な傾向として「子どもの個性を尊重する」ことは、かつてよりも意識され大切にされる社会・教育環境になっているように思えるが、実際に学生たちが幼少期を振り返った記録からは、子ども時代に「目立たないこと」や「手がかからないこと」を強く意識しながら過ごしていたという感覚とそれに対する後悔の大きさが極めて印象的だった。それは親や教育者の言動以上に、子どもも自身が親の期待に応えようとしたり、目立つことや失敗することを恐れることから自らを縛ってしまう心の動きが見て取れる。また、大学や就職活動の段階になってからは殊更に「自分らしさ」や「個性」が求められる時代だからこそ、幼少期の段階から個性を見出すことやそれを育むことについて、大人や社会の側はより強く意識しサポートするべきではないかということが感じられる。共生のためのルールや合わせることを学ぶことと、個性を育むことのバランスや両立について今一度考え直したい。

世界は広く、選択肢は多様にあることを知りたかった



- **子供の世界はとにかく狭く、限られていた**

- 子どもにとって「教室」が日常の大半を過ごす場所でありすべてだった
- お金もなく、移動手段や行動範囲も限られているため、見えるものも体験も限られていた
- 「教室」や「学校」に居場所がなくなれば、全てがおしまいだと感じるようなものだった

- **大学生になって世界がひらけた時、子ども時代に見ていたものも悩みが小さかったことに気がついた**

- 大学受験のタイミングで進学候補としての他地域や、ライバルとしての全国の同世代の存在をはじめてリアルに意識した
- 実際に大学に入ると、全国から集まってきた、経験や個性の違う人によって急激に世界がひらけた
- 校則がなくなり、親の目もゆるみ、自由になるお金もできることですべてが変わる

- **子ども時代から「外の世界があることを知っている」だけでも気持ちは違った**

- 「（学校の違う）友達と遊んだ体験」「同じ高校に行く、多くの中学生とSNSで繋がった体験」「習い事を通じたつながり」など世界が思ったよりも広いものだと実感できる小さな体験の積み重ねがある人は、学校生活にも余裕が持てる
- 検索やSNSを通じて、自分と同じ体験や感情を持っている人を見つけると、自分と似ている人もいるのだと安心する
- 多様な意見や性格の人がいるのであると知れる環境、意見を言い合えるような環境があると良い

世界は広く、選択肢は多様にあることを知りたかった



大人視点の補足

「子ども時代に見えている世界は狭く、限られている」ことは、いつの時代も基本的には変わらない。日本においては特に、高校の卒業／大学の進学といったタイミングで極端に世界が広がるような構造がある。

一度、広い世界があることを知った大人たちはそれが当たり前になってしまうため、**学校という閉じた狭い世界だけが世界の全てだと感じてしまう感覚**と、そこで失敗をしたり**居場所を失ったらおしまいだ**という、子どもの**「絶望感」**について、正しく認識しきれていないのではないか？

WS①の事前宿題案：気づきシート

ミク

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

子どもの世界は狭く、悩みが小さなことだと気づかせてほしかった

補足の説明

- ・大人にとって手のかからない優等生でいることにこだわりすぎていた。
- ・「いい子」「しっかりしている」という評価にとらわれ、周りから「できない」と思われることが何よりも怖くなった。
⇒褒められるのは嬉しいが、逆にそれが子どもにとってプレッシャーになってしまうこともある。
- ・子どもにとって教室は日常の大半を過ごす場所でありすべてだった。
⇒学校でうまくいなくても何の問題もない、学校という世界もそこでの出来事も小さなことだと気づかせてほしかった。
- ・大人に私の気持ちが分かるわけないと決めつけて何か悩みがあっても家族にも先生にも相談しなかった。
⇒同じような悩みを子ども時代に持っていた大人がいると知っていれば、相談はできなくても、何とかなるんだと思えたかもしれない。



人生は結果が全てではなく、失敗しても続くものだを知りたかった

- 最終的な「結果」ばかりを気にしすぎ、過程で得られているものについて意識できていなかった
 - テストの順位や部活動の成績など、結果が最も大事であるというプレッシャーを感じ、結果が出ないと長く落ち込んでいた
 - 「失敗⇔成功」の構造に自分も周りもとらわれてしまっている感覚があった
 - 成績の良い子が優遇（同じことをしても怒られ方が違うなど）される感覚などもその意識を強めるきっかけになった
 - 結果が出なければ絶望感や自己否定を感じ、次への原動力が湧かなくなってしまった
 - 今になって振り返れば、過程のなかで身についたことや得られた喜びもあったはずでそこに目を向けられればよかった
- 「（一度）失敗したらおしまい」だという感覚を強く持ちすぎてしまっていた
 - 大学受験で第一志望に受からなかったとき、未来が真っ暗になった気がしてすごく苦しかった
 - 実際に（第一志望ではない）大学に入ってみると、思いもよらない楽しさがあり、結果的によかったと思えた
 - 何かが上手く行かなくても一生どん底にいることはないし、その後の行いでいくらでもいい方向に変えられるという認識、「なんとかなる」という感覚を子どものうちに持つことができたならよかった
 - 自分の体験が一番だが、他者の“理想”ではない選択肢が受け入れ、それで幸せになれることが実例としてあると信じられる
 - 大人の「一人の人間」としての失敗や、“失敗”をした後の回復や続きを子供の頃に知れたら希望が持てる
 - 漫画やドラマなどのコンテンツを通じて失敗の豊かさを知ることだけでも力になる

人生は結果が全てではなく、失敗しても続くものだを知りたかった

WS①の事前宿題案：気づきシート

リナ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

「『人生は結果がすべてではない』ということを知ってほしかった。

補足の説明

【自分の過去】

テストで良い順位をとらないと、部活動で結果を残さないと、という考え方が強かった。テストで少しでも順位が落ちると何日間か引きずっていた。部活動では協調性など身に着けたことや学んだことはたくさんあるはずなのに、大会で良い成績を残せないと、活動している意味があるのか、自分は何もできない、と深く落ち込んでいた。いくらプロセスでたくさんの力をつけても結果が良くないと喜べなかった。

今振り返ると、「失敗は許されないことだ」、「結果がすべてだ」といういわば称号のようなものに必要以上にとらわれていたと思う。だが、仕方のないかもしれないが、学校自体が順位付けしたり成績の良い子を優遇（同じことをしても怒られ方が違うなど）したりと、結果を出している子にはそれ相応の対応をしていることも少なからずこの考え方に関係しているのでは、と思う。

社会には、そんな小さなコミュニティで出した結果が人生を左右するわけではない、その結果が社会が求めるすべてではないということを知ってくれる機会があるとよいと思う。

WS①の事前宿題案：気づきシート

ミサ

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

「理想の道に進めなくても人生が終わることはない」ということを教えてもらえる機会が欲しかった。

補足の説明

【過去の自分】

学校のテストや高校受験、大学受験において、大人たちが少しでもいい結果を求めているから、それに影響されて私もできるだけいい結果を求め、理想通りの結果にならないとこれからの人生がうまくいかないと思い込んでいた。

日々の小さなテストでも重く考えすぎて負担になっていた。

受験で進路を選ぶときは、ぎりぎりまで悩んで正解の道を気にしすぎていた。

大学受験で第一志望に受からなかったとき、未来が真っ暗になった気がしてすごく苦しかった。

今考えると、「テスト」というものを重く受け止めて過ぎていた。もちろん、努力していたことは決して無駄だったわけではないし学生の仕事は勉強であることは理解しているが、当時の私にとっては試験をすることや進路のことを考えるのがすごく不安で心が疲れる瞬間であった。

大人や社会には、「テストや受験でうまくいなくても一生どん底に落ちることはないし、その後の自分の行い次第でいくらでもいい方向に変えることができる」という認識を教えてもらえると良かったのかもしれない。

大人視点の補足

「一度の失敗で全てがダメになってしまう。という取り返しのつかない感覚」もまた、大人が忘れがちな子どもの心情かもしれない。子どもには元来失敗の体験が少ないことに加えて、就職氷河期や苛烈な競争にさらされた親世代が子どもに失敗をさせまいとする意識が背景にある可能性もある。学生たちの話からは「成功体験による自信」以上に、「失敗とそこから立ち直った体験」がその後の人生の支えになる様子がうかがえるため、立ち直りの支援や、上手くいっているように見える大人も一度も失敗をしていないわけではないことを伝える意義が感じられる。

相談をできる場所や人（大人）が欲しかった



- **信じられない／申し訳ない／自分のイメージを守りたい・・・様々な理由で子どもは大人に相談することができない**
 - 「大人に私の気持ちが分かるわけない」と決めつけて何か悩みがあっても家族にも先生にも相談しなかった
 - 厳しい親でなくても、親が忙しそうにしていると相談して負担をかけることを申し訳なく感じてしまう
 - 親や先生などの“評価する人”には、自分が“失敗”している風に思われたくないから相談できない
- **「問題」になる手前の、気軽な相談ができる人（大人）がいたらよかったと感じる**
 - SNSへの相談は匿名で行いやすいが、日々の悩みや本音を言える人が目に見える距離感にいればよかった
 - 塾の先生や近所の駄菓子屋、地域の公民館の方などが、さりげなく歩み寄ってくれたら嬉しかった
 - スクールカウンセラーはいたが、「シートを書いたら負け」という意識があった
 - 相談したら「問題」として「大ごと」になるという印象で、そうしたいわけではない
 - 例えば、問題がなくても定期的に話す時間が必ずあるような仕組みだったら相談がしやすい
- **大人が、子ども時代には同じような悩みを持っていたことを知るだけでも安心につながるかもしれない**





相談をできる場所や人（大人）が欲しかった



WS①の事前宿題案：気づきシート

カノン

ここまでの作業も含めて、自分や同級生のリアルな子ども時代を振り返るなかで、家族や先生に限らない大人や社会に「本当はもっとこうして欲しかった」「もっとこうならばよかった」という気づきを教えてください。どんなことでも構いませんが、できれば改めて振り返ったからこそ感じられた（一般にあまり認識されていない課題などの）気づきや、行政としてのサポートを考えるヒントになりそうな視点を教えてください。

ひとことで言うと

頼ることができる大人の存在が限られていた。

補足の説明

家族や友達は頼れるけど、先生はそもそも頼る対象になっていなかった。

【理由】

- ・悩みを打ち明けるほど親しい関係になく相談しにくい。
- ・職員室に入りにくい→先生を呼べない
- ・型にはまった答えだけでほしい言葉がもらえない



先生に相談することを諦める

他に相談できる大人って誰がいる？

親や友達に相談できる環境だったから悩まずに済んだ。相談できる環境にない子はどうするべきか



「頼れる人は周りにたくさんいるということ」や「1人で抱え込む必要がないこと」

頼り方などを教えてくれる場所が必要

（相談できる場所、人がいることを伝え、受け入れてくれる体制があるといいなと思った。）

Ex. ふらっと相談しに立ち寄れるオープンな場所を作り抵抗感を減らす。（地元のつながり、近所のお店）

些細なことでも話せる場所づくり。（相談のきっかけを作る窓口となる）

大人視点の補足

大人も、子ども時代に同じような悩みを持っていた人が多いはずなのに、**子どもは「大人に私の気持ちが分かるわけない」と決めつけてしまうもの。**

その理由の一つは、大人が特に子どもに対しては**アドバイスやどうすべきかの答えを与えようとする**ことがあることが伺えた。

アドバイスではなく同じ時代にあったことからの共感や、当時の学びを一つの選択肢として伝えてくれるような大人や場があれば、子どもはずっと生きやすくなる。

WS①「過去を振り返る」 まとめ

学生たちが子ども時代を振り返り考えた「本当はもっとこうして欲しかった／こうならばよかった」こと

